

選択体系機能文法の英語教育への応用： 節、過程中核部、主題の分析による作文の評価¹

佐々木真

愛知学院大学短期大学部

1. はじめに

21世紀の日本を巡る議論の一つとして、英語教育の早期化あるいは英語の公用語化がある(船橋 2000)。特にインターネットによるグローバル化が急速に浸透しつつある今日²では電子メールやホームページによる英語コミュニケーションは一般的なことになりつつあり、学生の実用的英語力をいかに向上させるかということが英語教育界に課せられた問題の一つになると思われる。これは我々英語教育の現場に携わるものとして避けて通れないことであり、「英作文」という授業を担当している私自身にとってもいかに英作文を評価し、授業を有機的に展開するかということと密接に関係している。

現実の社会生活の中でコミュニケーションの道具としての言語を捉える場合、言語はテキストとして具現化され、ある一定の機能を担っていると考えられる(Halliday 1978)。その機能とは相互作用者間で意味を交換するということであり、とりもなおさず、情報の付与、質問、命令、依頼等々ということである(Halliday and Hasan 1989, 山口 1998a, 1998b, 2000)。またこれらの機能は様々な用途や目的、すなわちジャンルにより異なる。従って、英作文の授業でもいかにその言語機能、すなわち意味を効率的に伝達するかを指導すべきであり、またその視点から評価もするべきであろう。具体的にはジャンル別の伝達の方策を鋳型として教授し、その鋳型、すなわちジャンル構造にそってテキストを構成しているかを評価するのである。そして選択体系機能文法で想定する3つのメタ機能の観点から評価するというのが現実的である。

そこで本論では学生が書いた英作文をこの言語機能の観点から捉え、実際にどれほどのコミュニケーション能力が学生たちの作文に反映されているのかを分析し、それをどのように評価すべきかを模索する。すなわち、文文法的な誤り、語彙の選択の誤りといった他に、何ができないのか、あるいは反対に何ができているのかを捉える方法を考察していく。

2. 英作文の評価方法

従来、英作文の評価方法についてはさまざまな手法や意見が述べられているが、古川(1999)の意見は極端ではあるが明快である。彼女は中学・高校生の英作文の評価は内容や、文法的な間違いにとらわれずに、書いた分量で評価すべきだと提言している。ある程度の語彙や文によって意志の疎通がはかれる作文にとって、計量的な測定はその扱い易

¹ 本論は佐々木(2000)、佐々木(2001)を基礎とし、さらにJASFL 2000での口頭発表での成果を付加、修正したものである。したがって本稿は上記の論文と重複する記述がある。

² 郵政省「通信白書平成11年度版」によれば日本のインターネット人口は1700万人で世帯普及率は11%であるが、企業普及率においては80%となっている。

さから魅力的で、英作文能力の一面を評価しているという正当性もある。しかしある程度英文法を学び、能力的な評価を求める大学生の英文指導にそのまま応用することは現実的ではないと思われる。

橋内 (1995)はライティングのテスト方法とその評価をあげて、どのような能力を測定できるのかを整理している。この中で特に「課題英作文の評価法」では次の五種類の評価法を列挙し、それぞれにメリット・デメリットをあげている。

- 1) 誤りを減点する「誤り減点法」
- 2) 5～20段階の評定尺度を使う「全体評価」
- 3) 文法、語彙などの項目別に採点する「分析的評価」
- 4) 「統括的評価」
- 5) 手順を重んじた「形成的評価」

中でも評定尺度の段階を設けた「全体評価」は語学の能力試験でも国内外で広く取り入れられた方法であり³、もっとも自然に受け入れられる評価法でもある。ところが、これらの評定尺度の段階をみると、たとえば「十分に自然であり、誤りも多くはない」などと記載されている。確かにこれらの尺度は評価する側には漠然とは理解されているが、それでも「自然さ」をどのように評価するのであろうか。評価者は「自然さ」というものを作文、言い換えればテキストを読む中で捉えていくわけだが、それは一体何をとらえているのであろうか。もし評価者が英語の母国語話者であれば「直感」も有効であろうが、我々のように英語を母国語としないものにとってはその自然さを捉える「直感」はない。それならば、テキストの中に「自然さ」が具現化されてポイントを把握していくしかないのではないだろうか。

そのポイントをつかむ上で Coulthard (1987)の研究は一つの指針を与えてくれるであろう。彼は糖尿病患者に対して配布された食事の注意書きを取り上げ、その注意書きがなぜ読者に理解されにくいのかを Halliday (1985)の枠組みを使って分析している。彼は書き手と読み手の相互理解を上手にはかるために書き方（たとえば質疑応答形式）をコントロールする必要があるとし、さらに節と節との配列が理解度を左右鍵だとも述べている。節と節との配列ということでは Ragan (1989)も同様にその重要性を説いている。彼は EFL の学生にブロックを使ってある図形を作成させる指示文を学生に書かせ、それを分析している。彼は主題展開を比較分析しながら、能力の高い学生と低い学生では指示を表現する節の配列に差があると指摘している。また能力の低い学生は高い学生よりも、適切な語彙選択ができていないとも述べている。

これらの研究に基づくと節の配列に関して評価することが評価の一つの指標になると考えられる。そこで、本論ではこの節の配列を分析する一環として、節の数、節の種類とその頻度に着目した。また節がどのように具現化されているか、すなわち「何がどうした」という内容面も当然「自然さ」を反映するものと仮定し、節頭にどのような主題が選択されているか、節がどのような「過程型」によって具現化されているかも分析することとした。

3. データについて

データは 1998 年度に愛知学院大学の「英語 1c」（担当者：佐々木真）を履修した文学部学生 2 年生が提出した作文 30 例を対象とした。この作文は前期試験に相当するレポート試験として与えた課題で、学生にはワープロかタイプを使用して A4 の紙に印刷する

³ ケンブリッジ英語検定など。また英作文ではないが、英検でも音読の評価で使用されている。

ことを条件としたが、枚数や語数に関しては自由とし、上限も下限も設定しなかった。作文のタイトルは 'My Plan for the Summer Vacation' とする事で統一させた。このタイトルを設定した理由としては、作文の提出が夏休み前でトピックを選びやすいだろうということ、ならびに授業で使用したテキスト⁴で前期の後半に未来形を使って将来の計画を記述させる単元があったことから、復習の意味を込めたものである。また授業で使用したテキストには作文例があり、それを参考とすることができるということも考慮した。⁵

4. 分析と考察

分析は提出された作文に data 1 ~ data 30 という番号を無作為にふり、その番号ごとに節の同定を行った。分析の枠組みは Halliday (1994) を使い、各文を節に区分してその数を挙げた。さらにその節を独立節、依存節⁶、挿入節のいずれかと同定しその頻度と割合を表にした。次に節の中で使用されている「過程中核部」を分析した。この分析では六種類の「過程型」のいずれかを同定し、その種類と頻度、ならびに割合を表にした。

主題部については T-Unit (Fries 1995, Thompson 1996) と呼ばれる一次的な主題を分析し、節複合の場合は節、そうでない場合は参与要素かあるいは付加詞かを同定し、その頻度と割合を分析した。また節複合の場合、二次的にさらに依存節の中に主題があるので、それについても参与要素か付加詞かの同定をおこなった。なおデータの中では独立節の節頭に and, but などの接続詞を多用するものが目立った。そこで主題分析に先立ち独立節の中にどれくらいの接続詞が使用されているのかを分析した。図 1 に示すのは分析例である。それぞれの節に conj (接続詞)、theme (主題)、theme anlys (主題が p (参与要素) かあるいは a (付加詞)、CLS (独立節か依存節か) を分類した。また PRS は過程型の種類を示し、No. は節の番号を示す。

conj	theme	theme anlys	No.	CLS	PRS	T-Unit
	I	p	1	ind	r	p
	I	p	2	ind	v	p
	I	p	3	ind	m	p
	We	p	4	ind	men	p
	The participants	p	5	ind	r	p

[図 1] 分析例

4.1 節の数

次の表 1 は各データにおける節の構成を一覧にしたものである。それぞれ独立節、依存節、挿入節の頻度を示している。

⁴ Ann Chenoweth and Curtis Kelly, *Basics in Writing*, Longman

⁵ このデータについては JASFL 2000 で発表した際に「テナーが不明確なテキストではないか」との批判がよせられた。確かにこの題材では読み手が教員に限られ実社会で頻繁にもちいられるタイプのテキストではない。しかし 2000 年度と同授業において「新たにペンパルとなろうとする人に出す手紙」というタイトルで英作文を書かせている。今後はこのテキストを分析の対象とする予定であるが、本件は評価の方法を探るという基礎的研究としての位置づけであることをご理解いただきたい。

⁶ 選択体系言語学において dependent clause と分類されるもの。分詞、接続詞、不定詞などで接続される節を指す。なお、ここではそれらを包括して「依存節」と仮に用語を設定し、使用することとする。

[表 1] 節の構成とその頻度

	独立節	依存節	挿入節	合計
Data 1	50	7	1	58
Data 2	38	5	0	43
Data 3	26	4	0	30
Data 4	29	4	0	33
Data 5	29	2	0	31
Data 6	33	6	0	39
Data 7	32	7	0	39
Data 8	21	2	0	23
Data 9	25	4	0	29
Data 10	18	6	0	24
Data 11	37	4	0	41
Data 12	39	8	0	47
Data 13	29	12	0	41
Data 14	43	14	0	57
Data 15	17	3	0	20

	独立節	依存節	挿入節	合計
Data 16	19	1	0	20
Data 17	43	0	0	43
Data 18	23	1	0	24
Data 19	27	4	0	31
Data 20	40	12	0	52
Data 21	45	11	0	56
Data 22	27	8	0	35
Data 23	14	3	0	17
Data 24	29	8	0	37
Data 25	45	7	1	53
Data 26	22	2	0	24
Data 27	28	1	0	29
Data 28	34	2	0	36
Data 29	52	14	1	67
Data 30	33	8	0	41
平均	31.6	5.7	0.1	37.3

ここでは節の合計数に着目する。もっとも節の数が多いものが Data 29 で、67 となっている。以下 59-50 という学生が 5 名、49-40 が 6 名、39-30 がもっとも多く 9 名、29-20 が 8 名、20 以下は 1 名である。少ないものは Data 23 で、わずかに 17 となっていて、Data 29 の三分の一弱となっている。この合計数の差はそのまま分量の差として反映されており、Data 29 が A4 で約 3 ページにわたるものであったのに対し、Data 23 や Data 16 は A4 の約半分をどうにか埋める程度のものであった。

節の数の問題は内容に対して、その情報性ということに深く関与してくる。すなわち節の数の少ないものは絶対的に伝える情報量に制限があるので、読み手の心を引きつけられない。次にあげるのは節の数をもっとも少ない Data 23 の冒頭から途中までのものである。三本の縦線は文と文との境界を表し、二本の縦線は節の境界を示す。

I am looking forward to my summer vercation. ||| I will go to a driving school in this summer. ||| I will enjoy with my club members in Nagano. ||| This club is a psychology club. ||| I am going to return to my hometown, Kanazawa. ||| I hope to have a party with my friends in there. ||| From there, in adition to, || I will go to Wazima to join another club.⁷|||

このデータをみると、二番目の文で自動車教習所のことをあげておいて、三番目の文では次の友人とのことに内容が変化し、免許のことなど自動車教習所のことをサポートする情報がでてこない。さらに四番目の文で前文の補足はあるものの、直後の文章ではさらに話題が故郷のことに移行している。このように節の数の問題は単に英文が書けていないということもさることながら、内容的にはある命題を提示した後にそれを細分化したり、展開したりする事ができないことを反映していると考えられる。したがって、ある命題を文章にして、直後にはまったく異なる命題をあげていく。結果的には情

⁷ スペルなど表記上の誤りは原文のまま。

報の流れがまったくなく、きわめて断片的で何を言いたいかを理解し難いものができるだろう。この点を考えれば古川が主張しているように分量による評価も考慮すべきかもしれない。なぜなら、節やそれにもなう過剰核部の数が少なければ表現されるトピックや内容に自ずから制限があり、その内容の説明が不足して読み手が求める情報を提供できないからである。

そこで使用する節の数の多いものが良いと考え、評価の高い順にそれぞれ Group A, Group B, Group C とグループ分けを行うこととする⁸。表 1 をさらに節の使用数の多い順から並べ替えると次の表 2 のようになる。

[表 2] 合計数で並べ替えた節の構成とその頻度

	独立節	依存節	挿入節	合計
Data 29	52	14	1	67
Data 1	50	7	1	58
Data 14	43	14	0	57
Data 21	45	11	0	56
Data 25	45	7	1	53
Data 20	40	12	0	52
Data 12	39	8	0	47
Data 2	38	5	0	43
Data 17	43	0	0	43
Data 11	37	4	0	41
Data 13	29	12	0	41
Data 30	33	8	0	41
Data 6	33	6	0	39
Data 7	32	7	0	39
Data 24	29	8	0	37

	独立節	依存節	挿入節	合計
Data 28	34	2	0	36
Data 22	27	8	0	35
Data 4	29	4	0	33
Data 5	29	2	0	31
Data 19	27	4	0	31
Data 3	26	4	0	30
Data 9	25	4	0	29
Data 27	28	1	0	29
Data 10	18	6	0	24
Data 18	23	1	0	24
Data 26	22	2	0	24
Data 8	21	2	0	23
Data 15	17	3	0	20
Data 16	19	1	0	20
Data 23	14	3	0	17
平均	31.6	5.7	0.1	37.3

表 2 を見てみると Data29 から Data 20 までは 50 以上の節を使用しており、さらに次の Data 12 とは五つ以上の差があるので、一つの区切りと考えられる。そこでこれを Group A としてみる。次に下位を見てみると、Data 27 と Data 10 の間にやはり五つ以上の差があり、ここも一つの区切りと見ることができる。そこで Data 12 から Data 27 までを Group B、それ以下を Group C と分類する。表 3 はこれをまとめたものであるが、これを節の数における評価表として仮定する。

もちろん節の数が少ないものはすべていけないのかということと必ずしもそうとは限らない。次にあげるのは Data 15 の冒頭から中盤までのものである。

First, I will get a license of motorbike during this summer vacation, || I would like to get one for a long time, || but I had no time to go a driving school. ||| This is my goal in summer vacation. ||| I have another goal. ||| It is to make some money by a part-time job and to get a motorbike. ||| Then I would like to ride on a motorbike.⁹|||

⁸ 以降のセクションでも同様。

⁹ スペルなど表記上の誤りは原文のまま。

この例ではトピックをオートパイのことに絞っており、それに関連した節が続いている。取り上げたトピックが少なく、全体としての節の数は少なかったものの、情報がさほど分断されることがなく、一つのトピックの中で関連する情報を連ねている。このことを考慮すれば単に節の数の少ないものを低く評価することはできないのだが、こういった例は節の種類や過程中核部などの他の評価基準を組み合わせることで必ずしも評価が悪くなることはない。

[表 3]節の合計数による
評価表

Group A	Group B		Group C
Data 29	Data 12	Data 28	Data 10
Data 1	Data 2	Data 22	Data 18
Data 14	Data 17	Data 4	Data 26
Data 21	Data 11	Data 5	Data 8
Data 25	Data 13	Data 19	Data 15
Data 20	Data 30	Data 3	Data 16
	Data 6	Data 9	Data 23
	Data 7	Data 27	
	Data 24		

4.2 節の種類

つぎに各節の構成とその割合を表示したものが、次の表 4 である。

[表 4]節の構成とその頻度の割合

	独立節	依存節	挿入節
Data 1	86.2%	12.1%	1.7%
Data 2	88.4%	11.6%	0.0%
Data 3	86.7%	13.3%	0.0%
Data 4	87.9%	12.1%	0.0%
Data 5	93.5%	6.5%	0.0%
Data 6	84.6%	15.4%	0.0%
Data 7	82.1%	17.9%	0.0%
Data 8	91.3%	8.7%	0.0%
Data 9	86.2%	13.8%	0.0%
Data 10	75.0%	25.0%	0.0%
Data 11	90.2%	9.8%	0.0%
Data 12	83.0%	17.0%	0.0%
Data 13	70.7%	29.3%	0.0%
Data 14	75.4%	24.6%	0.0%
Data 15	85.0%	15.0%	0.0%

	独立節	依存節	挿入節
Data 16	95.0%	5.0%	0.0%
Data 17	100.0%	0.0%	0.0%
Data 18	95.8%	4.2%	0.0%
Data 19	87.1%	12.9%	0.0%
Data 20	76.9%	23.1%	0.0%
Data 21	80.4%	19.6%	0.0%
Data 22	77.1%	22.9%	0.0%
Data 23	82.4%	17.6%	0.0%
Data 24	78.4%	21.6%	0.0%
Data 25	84.9%	13.2%	1.9%
Data 26	91.7%	8.3%	0.0%
Data 27	96.6%	3.4%	0.0%
Data 28	94.4%	5.6%	0.0%
Data 29	77.6%	20.9%	1.5%
Data 30	80.5%	19.5%	0.0%
平均	85.5%	14.3%	0.2%

ほとんどの学生は独立節の占める割合が多く、その比率は平均で 8.6 対 1.4 の割合である。また挿入節を使用できる学生はわずかに 3 名しかいない。その使用数も一つであり、

割合も2%前後でしかない。またこの表をよく見てみると、独立節を全体の86%以上使用しているものは半数の15名いるが、そのうちの11名は節全体の数が平均の37を下回っていることに気づく(表1参照)。書く分量の少ない学生は独立節を多く使用し、依存節をあまり使っていないのである。すなわち、節と節とを接続して論旨を展開したり、あるいは表現の幅をもたせることができないと考えられる。このことは先ほどの節の数で観察したことと一致する。

また独立節の多用は学生の中に節と節とを接合するという意識がなく、一文づつを個別に書き連ねていく習慣があると示唆しているのではないだろうか。またたとえ節を連結しても and や but のように情報を付加する程度のことしかできない(主題分析のセクションを参照のこと)。例年、英作文の最初の授業において、学生に自己紹介を英文で書くよう指示すると、多くの学生が一文づつ箇条書きのように記載し、パラグラフを構成するどころか、文と文とを接続するという体裁がとれないことに驚かされる。おそらくは中学、高校、大学を通じて英作文といえば文レベルで日本語を英語に訳す作業とイコールになっており、いくつもの文あるいは節を組み合わせて、まとまった考えを表出する練習がなされてこなかったからであろう。文レベルに偏重した英作文指導の弊害がこのような形で現れていると思われる。

独立節は必ずしも単独の文として現れるとは限らない。中には接続詞を多用し、独立節と依存節を連結しながらテキストを形成する学生がいる。しかし節の連結によって修飾関係があればいいということはない。次にあげるのは Data 21 の冒頭である。この例ではいくつもの節が連結されて話し言葉のように切れ目なく書き続けられている。

I would like to write my plan for the summer vacation. ||| I want to travel somewhere very much but sadly, || I do not have much money || so I have to have a part-time job || and I have to get lots of money || but they are suffering from a serious depression in this country || so I can not find a good part-time-job yet. ||| If I can travel somewhere || I want to go to Hokkaido|| and I am going to Visit a stock farm || because I like horses || and I like horse rasing || so I will ask a stock farmer || “Are there any good rasing horses in here?” || and I ask them || “Could you employ for summer vacation?”|| maybe they say OK || so I will work in stock farm.¹⁰|||

このデータでは旅行とその旅費の捻出、さらに旅行先とトピックに一貫性があり、また接続詞を多用することで各節の論理構造が明らかになっている。この点ではある程度の評価をしても良いと考えられる。ただし、逆に独立節の制御ができず、何が命題を表出する節で、何がそれを補填する節なのかの判断がつかない。おそらくは日本語が節を「で」「て」といった助詞でいくつも接続される影響がでていとも考えられる。したがって、独立節と依存節の割合を評価の材料とする場合には、まず依存節が使用されているかどうか、そして、どれほどの割合で使用されているかに着目すべきであろう。

そこで仮説として依存節を使用する割合の多いものは節の修飾関係を使うことができ、論旨展開ができていると仮定し、依存節の占める割合が高いものから評価の高いものとしてグループ分けをすることとする。

表5では依存節の占める割合に大きな差が見られないが、Data 30 と Data 7 の間に1.6%、同様に Data 12 と Data 6 の間に1.6%の差異がある。ここでは仮に20%を一つの目安として Data 13 から Data 30 までを Group A としておく。次に少ないものとしては10%以下ということの一つの目安にして、Data 11 から Data 17 までを Group C とし、残りの Data 7 から Data 2 までを Group B とする。これをまとめて節の種類における評価表としてあげることとする。

¹⁰ スペルなど表記上の誤りは原文のまま。

[表 5] 依存節の割合で並べ替えた節の構成とその割合

	独立節(%)	依存節(%)	挿入節(%)
Data 13	70.7%	29.3%	0.0%
Data 10	75.0%	25.0%	0.0%
Data 14	75.4%	24.6%	0.0%
Data 20	76.9%	23.1%	0.0%
Data 22	77.1%	22.9%	0.0%
Data 24	78.4%	21.6%	0.0%
Data 29	77.6%	20.9%	1.5%
Data 21	80.4%	19.6%	0.0%
Data 30	80.5%	19.5%	0.0%
Data 7	82.1%	17.9%	0.0%
Data 23	82.4%	17.6%	0.0%
Data 12	83.0%	17.0%	0.0%
Data 6	84.6%	15.4%	0.0%
Data 15	85.0%	15.0%	0.0%
Data 9	86.2%	13.8%	0.0%
Data 3	86.7%	13.3%	0.0%
Data 25	84.9%	13.2%	1.9%
Data 19	87.1%	12.9%	0.0%
Data 4	87.9%	12.1%	0.0%
Data 1	86.2%	12.1%	1.7%
Data 2	88.4%	11.6%	0.0%
Data 11	90.2%	9.8%	0.0%
Data 8	91.3%	8.7%	0.0%
Data 26	91.7%	8.3%	0.0%
Data 5	93.5%	6.5%	0.0%
Data 28	94.4%	5.6%	0.0%
Data 16	95.0%	5.0%	0.0%
Data 18	95.8%	4.2%	0.0%
Data 27	96.6%	3.4%	0.0%
Data 17	100.0%	0.0%	0.0%
平均	85.5%	14.3%	0.2%

[表 6] 節の種類による評価表

Group A	Group B	Group C
Data 13	Data 7	Data 11
Data 10	Data 23	Data 8
Data 14	Data 12	Data 26
Data 20	Data 6	Data 5
Data 22	Data 15	Data 28
Data 24	Data 9	Data 16
Data 29	Data 3	Data 18
Data 21	Data 25	Data 27
Data 30	Data 19	Data 17
	Data 4	
	Data 1	
	Data 2	

4.3 過程中核部

つぎに節がどのように意味内容を具現化されているかをみる。この意味内容は三種類の「メタ機能」によって具現化されるが (Halliday 1994)、今回はそのうちの過程構

成に着目し、その中心的な位置を占める過程中核部を分析した。過程中核部は動詞句により表現され、「物質過程」、「関係過程」、「心理的過程」、「存在過程」、「行動過程」そして「言動過程」のいずれかに分類された。物質過程は行為や出来事を表し、いわゆる動きを示す一般動詞によって具現化される。関係過程は異なった実体の関係を示し、be 動詞や regard のような動詞で示される。心理的過程は知覚や感情、あるいは認識をあわらし、たとえば see, hope などの動詞で表現される。存在過程は何かが存在することを表し、there is/are の形で表現されるものが典型的である。行動過程は呼吸などの人間の生理活動や心的活動を表す。たとえば sleep などである。言動過程は「話す」などの言動や表象行為を示す。

またデータの中には本来なら「参与要素」、「過程中核部」、「環境要素」という「過程構成」によって表現されるべきものが、動詞句の欠落により過程中核部のみられないものがある。それらについてはあえて過程型の同定をせずに「なし」という項目を設定し分類した。¹¹

次頁に示す表 7 はそれぞれの過程型の頻度を示したものである。なお、各節に対して過程中核部を同定したためにその合計は節の合計数と一致している。この表によると多くの学生が物質過程を使用していることがわかる。

この作文は夏休みの計画を述べさせるというものであり、ジャンルとしてはナラティブに分類することができるであろう。ナラティブの場合は出来事や登場人物の考える内容、状況説明といった記述が主なものと考えられる。したがって今回の分析で示されたように物質過程がその多くを占め、つづいて関係過程、心理的過程が続くのは当然と考えられる。

つぎに過程中核部の合計数の少ない学生がどの過程型でもその頻度が少なくなっていることが観察される。たとえば物質過程、心理的過程、関係過程のそれぞれの平均数を下回るデータを見てみると物質過程で 18 例中 14 例、心理的過程で 19 例中 13 例、関係過程で 19 例中 15 例と、その大半は節の過程中核部、すなわち節の数が少ない学生になっている(表 1 参照)。これは全体の節の絶対数が少なく、さらに各過程型を一定の割合で使用しているためであろう。また反対に、過程中核部の合計数が多くなるにつれて言動過程、存在過程を使用する頻度が上がっている。これは節が多ければ多いほど表現のバラエティが増えることを意味しているのではないだろうか。

83 頁の表 8 はそれぞれの過程型の頻度の割合を示したものである。表 8 を見てみると全体の 5 割弱が物質過程で占められている。その比率の高さにより、学生たちが具体的な行動、動きを主に表現していることがわかる。またこの平均値の 47.3% を下回るものはデータ中に 13 例あるが、その中で節の絶対数が平均を下回るものはわずかに 4 例しかない。すなわち節の絶対数に関わらず主になる過程型が一定の割合以上で使用されることになる。

心理的過程では、その平均が 21.5% になっており、それを下回るものは 19 例ある。そしてそのうちの 11 例は節の絶対数が平均を下回るものとなっている。また関係過程でも同様のことが言える。その平均が 24.9% であり、それを下回るものは 15 例ある。そして、その半数を超える 8 例が節の絶対数の平均を下回る学生である。このようにみえてみると、節の絶対数が少なくなるにつれて心理的過程や関係過程を使用しなくなっているのである。

¹¹ 「省略」という概念を応用して、過程型を同定することは不可能ではない。しかし、今回のデータのように母国語話者の書いたものでない作文の場合、特に日本の学生のように日頃英語を書く機会がほとんどない学習者の場合には、過程中核部が意図的に省略されているというよりは表記する能力そのものがないと考える方が妥当だと思われる。

[表 7]過程型とその頻度

	物質過程	心理的過程	関係過程	行動過程	言動過程	存在過程	なし	合計
Data 1	27	10	15	0	6	0	0	58
Data 2	27	3	12	0	1	0	0	43
Data 3	16	3	9	0	2	0	0	30
Data 4	16	8	7	0	1	0	1	33
Data 5	13	14	4	0	0	0	0	31
Data 6	24	6	8	0	0	0	1	39
Data 7	12	6	15	0	0	0	6	39
Data 8	11	3	7	0	1	1	0	23
Data 9	14	5	9	0	1	0	0	29
Data 10	15	2	7	0	0	0	0	24
Data 11	14	8	18	0	1	0	0	41
Data 12	19	15	10	0	3	0	0	47
Data 13	25	7	6	0	2	1	0	41
Data 14	23	11	12	3	0	8	0	57
Data 15	11	1	7	0	1	0	0	20
Data 16	10	3	7	0	0	0	0	20
Data 17	27	3	11	1	0	1	0	43
Data 18	15	5	3	0	1	0	0	24
Data 19	15	5	8	0	0	3	0	31
Data 20	8	26	16	0	0	2	0	52
Data 21	28	14	9	0	4	1	0	56
Data 22	10	14	8	0	2	0	1	35
Data 23	9	5	3	0	0	0	0	17
Data 24	15	6	14	1	1	0	0	37
Data 25	21	13	13	0	3	2	1	53
Data 26	6	10	5	0	1	1	1	24
Data 27	22	4	2	0	0	0	1	29
Data 28	22	6	7	0	1	0	0	36
Data 29	21	17	19	0	2	5	3	67
Data 30	17	15	8	0	0	1	0	41
平均	17.1	8.3	9.3	0.2	1.1	0.9	0.5	37.3

[表 8]過程型とその頻度の割合

	物質過程	心理的過程	関係過程	行動過程	言動過程	存在過程	なし
Data 1	46.6%	17.2%	25.9%	0.0%	10.3%	0.0%	0.0%
Data 2	62.8%	7.0%	27.9%	0.0%	2.3%	0.0%	0.0%
Data 3	53.3%	10.0%	30.0%	0.0%	6.7%	0.0%	0.0%
Data 4	48.5%	24.2%	21.2%	0.0%	3.0%	0.0%	3.0%
Data 5	41.9%	45.2%	12.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
Data 6	61.5%	15.4%	20.5%	0.0%	0.0%	0.0%	2.6%
Data 7	30.8%	15.4%	38.5%	0.0%	0.0%	0.0%	15.4%
Data 8	47.8%	13.0%	30.4%	0.0%	4.3%	4.3%	0.0%
Data 9	48.3%	17.2%	31.0%	0.0%	3.4%	0.0%	0.0%
Data 10	62.5%	8.3%	29.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
Data 11	34.1%	19.5%	43.9%	0.0%	2.4%	0.0%	0.0%
Data 12	40.4%	31.9%	21.3%	0.0%	6.4%	0.0%	0.0%
Data 13	61.0%	17.1%	14.6%	0.0%	4.9%	2.4%	0.0%
Data 14	40.4%	19.3%	21.1%	5.3%	0.0%	14.0%	0.0%
Data 15	55.0%	5.0%	35.0%	0.0%	5.0%	0.0%	0.0%
Data 16	50.0%	15.0%	35.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
Data 17	62.8%	7.0%	25.6%	2.3%	0.0%	2.3%	0.0%
Data 18	62.5%	20.8%	12.5%	0.0%	4.2%	0.0%	0.0%
Data 19	48.4%	16.1%	25.8%	0.0%	0.0%	9.7%	0.0%
Data 20	15.4%	50.0%	30.8%	0.0%	0.0%	3.8%	0.0%
Data 21	50.0%	25.0%	16.1%	0.0%	7.1%	1.8%	0.0%
Data 22	28.6%	40.0%	22.9%	0.0%	5.7%	0.0%	2.9%
Data 23	52.9%	29.4%	17.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
Data 24	40.5%	16.2%	37.8%	2.7%	2.7%	0.0%	0.0%
Data 25	39.6%	24.5%	24.5%	0.0%	5.7%	3.8%	1.9%
Data 26	25.0%	41.7%	20.8%	0.0%	4.2%	4.2%	4.2%
Data 27	75.9%	13.8%	6.9%	0.0%	0.0%	0.0%	3.4%
Data 28	61.1%	16.7%	19.4%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%
Data 29	31.3%	25.4%	28.4%	0.0%	3.0%	7.5%	4.5%
Data 30	41.5%	36.6%	19.5%	0.0%	0.0%	2.4%	0.0%
平均	47.3%	21.5%	24.9%	0.3%	2.8%	1.9%	1.3%

これらのことは何を意味するのであろうか。おそらく節の絶対数の少ない学生は内容的に「何をするのか」ということを伝えることが主になってしまい、その出来事の内容を説明したり、あるいはその出来事についての考えを述べるができないということになるのではないだろうか。ここでもう一度先に引用した Data 23 の冒頭を見てみよう。

I am looking forward to my summer vacation. ||| I will go to a driving school in this summer. ||| I will enjoy with my club members in Nagano. ||| This club is a psychology club. ||| I am going to return to my hometown, Kanazawa. ||| I hope to have a party with my friends in there. ||| From there, in addition to, || I will go to Wazima to join another club. |||¹²

このデータでは第二節の中で自動車教習所に行くと言いつつ、その教習所がたとえば実家にある教習所であるとか、あるいは運転免許証をとることを望んでいたとかの補足説明が全くない。もしそのような説明をするとするならば関係過程や心理的過程で表現されるであろう。すなわち、英作文能力の低い学生は単に量的な問題ではなく、単に「何かをする」とか「何かが起きる」といった出来事を記述することができても、その出来事がどのようなものであるとか、あるいはどのように考えると、さらには価値判断をどのように下すなどの表現が困難なのである。そしてそのことが、ひいては情報量の不足となり、具現化される節の量に反映されると考えられる。反対に作文能力の高い学生は物質過程、心理的過程ならびに関係過程以外の過程型を駆使して、さまざまな表現ができるということが言えるであろう。次に引用するのは Data 14 の冒頭である。このデータでは物質過程、心理過程、関係過程において平均値をわずかに下回るものの、他に存在過程、言動過程の使用が認められる。

I have a plan for the summer vacation. ||| I'm a member of the camping circle. ||| This summer we are planning to go camping twice. ||| First, we are planning to go Itadori camping ground in Gifu from 5th August to 7th August. ||| Last year we had camping twice too, || but unfortunately there was a heavy rain. ||| I have a presentiment that it is likely to rain. ||| Because, this making twice, ||there'd be a third time || and it almost rained || when we did something in circle. |||¹³

この例では言動過程の現れる節はないが、物質過程が四カ所 (are planning to go; are planning to go; had camping; did)、心理的過程が二カ所 (have a plan; have a presentiment)、関係過程が一カ所 (am)、存在過程が四カ所 (there was; making; there'd be; rained) が観察される。ここではキャンプの計画、その実施地、スケジュール、さらに今年のキャンプの出来事とキャンプに関しての自分の心理と、一貫してキャンプのことに関連した事象を記述し、しかもその情報に展開がある。このように様々な過程型の存在は表現の多彩なバラエティとして具現化され、読み手を引きつける役割を果たすと考えられる。¹⁴

それではこの過程中心部の分析結果からどのような評価表を作成できるのだろうか？ここでは物質過程の使用の他にも様々なタイプの過程を使うことができるもの程良いと仮定し、次のような評価基準を作成することとした。すなわち物質過程の比率が平均以下で、かつ心理的過程と関係過程という主要過程以外の過程型を使用するものを Group A、逆に物質過程の使用比率が平均以上で、かつ心理的過程と関係過程という主要過程の使用比率が平均以下であるものを Group C、それ以外のものを Group B とした。次の表 9 がそれをまとめたものである。

¹² スペルなど表記上の誤りは原文のまま。

¹³ スペルなど表記上の誤りは原文のまま。

¹⁴ もちろん、情報の結合性を読者に伝えるためには、過程構成で使用される「参与要素」や「環境要素」などの照応関係も重要な因子となるが、これについてはまた別の機会でも議論することにした。

[表 9] 過程中核部による評価表

Group A	Group B		Group C
Data 14	Data 1	Data 12	Data 6
Data 24	Data 2	Data 15	Data 13
Data 25	Data 3	Data 16	Data 18
Data 26	Data 4	Data 17	Data 27
Data 29	Data 5	Data 19	Data 28
	Data 7	Data 20	
	Data 8	Data 21	
	Data 9	Data 22	
	Data 10	Data 23	
	Data 11	Data 30	

4.4 節頭の接続詞

学生の作文を評価していると次の例のように節頭に and, so, because などの接続詞を多用するものがあることに気づく。これは Data9 の作文である。主題部の接続詞を健在化させるために太字斜体で表記する。

In July, I must take many test in university. ***But*** I finished it in safety. ***So***, I'm looking forward to summer vacation. ***And*** I have a plan in summer. To be exact, I have two things what I want to do in summer

At first I want to have part-time job. That is, I'd like much money. ***Because*** I had a driver's license in March. ***So***, I want to have a car. ***And*** I would like to go to school by car every day. ***And*** I'll go to the place where I want to go. In addition, I want personal computer, television an air conditioner. My room doesn't have them. ***So***, I don't feel comfortable.

At second I want to study English very hard. ***Because*** I'm planning to study English in United Kingdom or Australia or United States next summer. That is, I want to become a English teacher in high school. ***And*** I'd like to teach students that English has attractiveness and pleasure. ***So***, I'll experience the Native Speaker's voice. ***And*** I also want to learn their culture.

The above is my plan for summer vacation. I want to have part-time job and study English so hard. ***And*** I will spend my all time to do it. ***And*** I will play with my friends and go to Tokyo for pleasure. As a result, I'd like to make good use of my summer vacation.¹⁵

依存節において接続詞から節を始めることは何らの問題もないが、学生は単独の独立節においても and や but から始めることが多い。たしかに話し言葉であればこのような接続詞で節を始めることに違和感はない。しかし書き言葉として表記していく場合はいささかくどいと感じるのではないだろうか。またライティングのテキストではこれらの接続詞から文を書き始めてはいけないという指示がある^{16,17}。そこでこのような接続詞の使用を顕在化させるとために特に主題部のテキストの主題の中から接続詞に焦点をあて

¹⁵ スペルなど表記上の誤りは原文のまま。

¹⁶ 一例として、Olsher (1996) *Words in Motion*, Oxford: Oxford University Press がある。

¹⁷ もちろん単純に書いたものだから、話されたものだからという物理的媒体によって、節頭の接続詞の有無を論じるのは早計で、テキストが使用される状況、目的という使用域（レジスター）によってその妥当性は変化する。

て独立節に対して接続詞を使用しているのか調べた。つぎにあげる表 10 は使用されている独立節の数とそこで使用されている接続詞の頻度、そしてその使用比率をまとめたものである。

[表 10]独立節とそこで使用される接続詞

	独立節	接続詞	接続詞の割合
Data 1	50	7	14.0%
Data 2	38	10	26.3%
Data 3	26	3	11.5%
Data 4	29	11	37.9%
Data 5	29	5	17.2%
Data 6	33	13	39.4%
Data 7	32	3	9.4%
Data 8	21	5	23.8%
Data 9	25	14	56.0%
Data 10	18	6	33.3%
Data 11	37	11	29.7%
Data 12	39	7	17.9%
Data 13	29	10	34.5%
Data 14	43	9	20.9%
Data 15	17	4	23.5%

	独立節	接続詞	接続詞の割合
Data 16	19	9	47.4%
Data 17	43	11	25.6%
Data 18	23	3	13.0%
Data 19	27	5	18.5%
Data 20	40	4	10.0%
Data 21	45	25	55.6%
Data 22	27	11	40.7%
Data 23	14	1	7.1%
Data 24	29	7	24.1%
Data 25	45	3	6.7%
Data 26	22	5	22.7%
Data 27	28	6	21.4%
Data 28	34	9	26.5%
Data 29	52	8	15.4%
Data 30	33	8	24.2%
平均	31.57	7.77	25.2%

この表によれば独立節の半分以上に対して、接続詞を使用している学生がいることがわかる。たしかに節等位関係で結びつける場合には and, but などの接続詞が使用されるので、独立節であっても節頭に接続詞が用いられるケースがあるのは当然である。しかしながらある程度の割合を越えるというのは節複合ではなくても節頭を接続詞から始めるということが考えられる。そこで、表 10 において独立節で使用される接続詞の割合を見てみると Data 9, Data16, Data21 はその割合が 45%以上に達する。また Data6, Data22 についてもその使用率は 40%前後となっており他のデータに比べると高いと言えるだろう。実際に先に引用した Data 9 をもう一度みてみよう。

In July, I must take many test in university. *But* I finished it in safety. *So*, I'm looking forward to summer vacation. *And* I have a plan in summer. To be exact, I have two things what I want to do in summer

At first I want to have part-time job. That is, I'd like much money. *Because* I had a driver's license in March. *So*, I want to have a car. *And* I would like to go to school by car every day. *And* I'll go to the place where I want to go. In addition, I want personal computer, television an air conditioner. My room doesn't have them. *So*, I don't feel comfortable.

At second I want to study English very hard. *Because* I'm planning to study English in United Kingdom or Australia or United States next summer. That is, I want to become a English teacher in high school. *And* I'd like to teach students that English has attractiveness and pleasure. *So*, I'll experience the Native Speaker's voice. *And* I also want to learn their culture.

The above is my plan for summer vacation. I want to have part-time job and study English so hard. *And* I will spend my all time to do it. *And* I will play with my friends

and go to Tokyo for pleasure. As a result, I'd like to make good use of my summer vacation.

このデータの場合は特に and と so で先行する情報に次の情報を付加することが顕著に現れていると言える。また because を節頭において節を始める傾向にあることがわかるが、これは中学以来 why で始まる疑問文に対する返答を because で始めるということが強調され、理由を導く際の接続詞としての用法に慣れていないということが考えられよう。

反対に接続詞を節頭に用いないものもある。Data7, Data23, Data25 においてはその使用率が10%以下となっている。次の例は Data 23 の作文であるが、節頭に接続詞をほとんど用いていない。

I am looking forward to my summer vacation. I will go to a driving school in this summer. I will enjoy with my club members in Nagano. This club is a psychology club. I am going to return to my hometown, Kanazawa. I hope to have a party with my friends in there. From there, in addition to, I will go to Wazima to join another club. This club is a Karate team. In there, I will play a Karate for six days. I will have to have a experiment of a psychology for a AGU festival. The theme of the experiment is confidence in social. I hope that the experimet will succeed.

I want to do something else, going to swim in pool or sea, having some parties, going to play in many places, playing many sports, and studying a psychology and a philosophy, but, I am most interested in many encounter with various people in this summer.¹⁸

この例では節頭に接続詞が現れるのは最後の節の but だけで、これも節複合の中で使用されているために、まったく違和感を与えない。このことから独立節の節頭での接続詞の使用率の低いものは評価を高くし、逆に使用率の高いものは評価を低くすることができるかと仮定できるであろう¹⁹。

ところがここで一つ問題が生じる。それは接続詞の使用比率が高いものは評価を低くすることはできるのだが、使用率の低いものの評価を高くする場合にどれほどその使用率が低ければいいかがわからないのである。テキストの作成上、接続詞は必要なもので、使わないことが必ずしも良いと言うことにはならない。また今回分析したデータからはそれ以上のことは予測できない。そこでこのセクションにおける評価表は評価の低い Group C だけをあげることにする。

[表 11] 接頭の接続詞による評価表

Group C			
Data 9	Data 22	Data 13	Data 23
Data 21	Data 6	Data 10	Data 25
Data 16	Data 4	Data 7	

4.5 主題部（一次分析）

T-Unit, すなわち一時的な主題部分析については使用されている主題が参与要素か、付加詞か、あるいは節複合による節なのかを分類した。次の表 12 はそれぞれの頻度を示したもので、表 13 はそれを割合で示したものである。

¹⁸ スペルの間違いなどは学生によって提出されたオリジナルのまま。

¹⁹ だからといって、この指標だけで Data 23 の作文が良いと評価するわけではない。

[表 12]主題部（一次分析）の構成と頻度

	参与要素	付加詞	節	合計
Data 1	43	6	2	49
Data 2	33	3	2	36
Data 3	22	6	0	28
Data 4	20	7	0	27
Data 5	20	8	1	28
Data 6	26	5	1	31
Data 7	22	6	2	28
Data 8	19	2	0	21
Data 9	18	8	0	26
Data 10	16	5	1	21
Data 11	32	7	1	39
Data 12	26	16	1	42
Data 13	22	9	2	31
Data 14	35	13	3	48
Data 15	15	5	0	20

	参与要素	付加詞	節	合計
Data 16	16	1	0	17
Data 17	32	10	0	42
Data 18	15	5	0	20
Data 19	20	8	0	28
Data 20	36	8	3	44
Data 21	46	6	2	52
Data 22	23	2	2	25
Data 23	13	2	0	15
Data 24	25	6	1	31
Data 25	40	10	0	50
Data 26	14	8	0	22
Data 27	19	7	1	26
Data 28	25	7	2	32
Data 29	46	8	1	54
Data 30	26	12	0	38
平均	25.5	6.9	0.9	32.4

[表 13]主題部（一次分析）の構成と割合

	参与要素	付加詞	節
Data 22	92.0%	8.0%	8.0%
Data 07	78.6%	21.4%	7.1%
Data 20	81.8%	18.2%	6.8%
Data 13	71.0%	29.0%	6.5%
Data 14	72.9%	27.1%	6.3%
Data 28	78.1%	21.9%	6.3%
Data 02	91.7%	8.3%	5.6%
Data 10	76.2%	23.8%	4.8%
Data 01	87.8%	12.2%	4.1%
Data 21	88.5%	11.5%	3.8%
Data 27	73.1%	26.9%	3.8%
Data 05	71.4%	28.6%	3.6%
Data 06	83.9%	16.1%	3.2%
Data 24	80.6%	19.4%	3.2%
Data 11	82.1%	17.9%	2.6%

	参与要素	付加詞	節
Data 12	61.9%	38.1%	2.4%
Data 29	85.2%	14.8%	1.9%
Data 03	78.6%	21.4%	0.0%
Data 04	74.1%	25.9%	0.0%
Data 08	90.5%	9.5%	0.0%
Data 09	69.2%	30.8%	0.0%
Data 15	75.0%	25.0%	0.0%
Data 16	94.1%	5.9%	0.0%
Data 17	76.2%	23.8%	0.0%
Data 18	75.0%	25.0%	0.0%
Data 19	71.4%	28.6%	0.0%
Data 23	86.7%	13.3%	0.0%
Data 25	80.0%	20.0%	0.0%
Data 26	63.6%	36.4%	0.0%
Data 30	68.4%	31.6%	0.0%
平均	78.6%	21.4%	2.7%

参与要素と付加詞については後述の主題部（二次分析）で扱うこととし、ここでは節を主題に用いている割合に注目する。節複合には等位関係(paratactic)と従属関係(hypotactic)があり(Halliday 1994)、節を主題としてとれるのはこのうちの従属関係にある。そして主題として取り上げられるのは主節ではなく従属節である。この従属関係にある節複合では when や if を伴った時間や条件、あるいは although や as によって導かれる理由や付帯状況などが示されることが多い。ところが表 12 を見てみるとこの節を主題として取り上げている数は大変に少なく、一つないし二つである。すなわち学生たちにはこのような内容を記述する力に乏しいと考えられる。

そこでこの節を主題とする割合の多いものから評価を高くすることができると想定し、その割合から評価基準を仮定してみる。次の表 13 は表 12 を割合で表示したもので、節の使用割合の高い順から並べ替えてある。

表 13 を見てみると節を主題として使用する率が 5%以上のもの、5%以下で 1%以上のもの、0%のものと大別できる。そこでそれぞれを Group A, Group B, Group C として分類し、これを主題部（一次分析）における評価表とする。

[表 14]主題部（一次分析）
における評価表

Group A	Group B	Group C
Data 22	Data 01	Data 03
Data 07	Data 21	Data 04
Data 20	Data 27	Data 08
Data 13	Data 05	Data 09
Data 14	Data 06	Data 15
Data 28	Data 24	Data 16
Data 02	Data 11	Data 17
	Data 12	Data 18
	Data 29	Data 19
		Data 23
		Data 25
		Data 26
		Data 30

4.6 主題部（二次分析）

主題部（二次分析）においては従属節の主題部も含めて、使用される主題がどのようなものを分析した。すなわち主題部において過程部を構成する参与要素が主題として使われるのか、あるいは節を修飾する副詞や法性に関わる付加詞が使用されるのかということである。次の表 15 はその分析結果で、参与要素の頻度と割合、付加詞の頻度と割合を示している。

[表 15]主題部（二次分析）の種類とその割合

	参与要素	割合(%)	付加詞	割合(%)	合計
Data 1	47	88.7%	6	11.3%	53
Data 2	31	79.5%	8	20.5%	39
Data 3	22	78.6%	6	21.4%	28
Data 4	20	74.1%	7	25.9%	27
Data 5	22	73.3%	8	26.7%	30
Data 6	28	84.8%	5	15.2%	33
Data 7	23	79.3%	6	20.7%	29
Data 8	19	90.5%	2	9.5%	21
Data 9	18	69.2%	8	30.8%	26
Data 10	17	77.3%	5	22.7%	22
Data 11	34	82.9%	7	17.1%	41
Data 12	29	65.9%	15	34.1%	44
Data 13	25	71.4%	10	28.6%	35
Data 14	38	70.4%	16	29.6%	54
Data 15	15	75.0%	5	25.0%	20
Data 16	16	94.1%	1	5.9%	17
Data 17	32	76.2%	10	23.8%	42
Data 18	15	75.0%	5	25.0%	20
Data 19	20	71.4%	8	28.6%	28
Data 20	40	81.6%	9	18.4%	49
Data 21	49	87.5%	7	12.5%	56
Data 22	27	93.1%	2	6.9%	29
Data 23	13	86.7%	2	13.3%	15
Data 24	27	81.8%	6	18.2%	33
Data 25	40	80.0%	10	20.0%	50
Data 26	14	63.6%	8	36.4%	22
Data 27	19	79.2%	5	20.8%	24
Data 28	29	80.6%	7	19.4%	36
Data 29	49	87.5%	7	12.5%	56
Data 30	25	67.6%	12	32.4%	37
平均	26.8	78.9%	7.1	21.1%	33.9

この表によるとデータの多くが主題部に参与要素を使用していて、付加詞との割合はほぼ8対2となっている。データで使用されている参与要素の多くは作文の主体であるIが占めている。次にあげる例はData 16の作文であるが、ここではほぼすべての主題部に参与要素が使用され、付加詞は1つしか用いられていない。

Main event of this summer vacation is to take part in "Ultra Quiz". I have wanted to go this event since high school age. So I am looking forward to go and studying quiz now.

Second event is to cycling. I have ever done cycling from Aichi to Kyouto about 200km. So I will run more longer from Aichi to Hokkaido. But that is schedule, I don not know how long run.

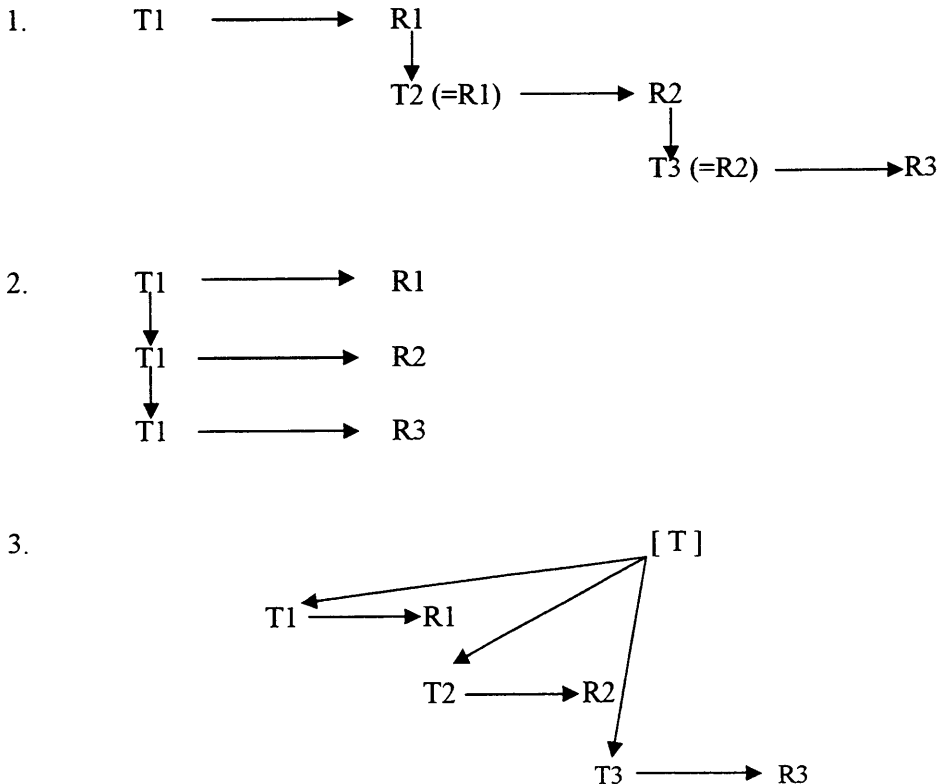
And 14 August is my birthday. I am twenty-one this year. The day is assembly to play every year with my friends of primary school age.

And I want to trip country there can play free with my friends by car.

But I will not play only. I will study or read books and I will study to get capacity, for example TOEIC.

I want to make my summer vacation fun.

分析したデータの多くは人称代名詞、あるいは先行する事象を示す指示代名詞が主題部として使用される傾向にある。例の1のように同じ人称代名詞が一連の主題部としてが取り上げられると、そこに主題部間のつながりが発生するために一応のテキストの結束性が生まれると考えられる。たとえば次の図はテーマ展開の図であるが、この中の図で言えば、2のパターンに相当するだろう。



[図 2]テーマ展開のパターン

しかし、あまりに1を主題とした節が続く文章ではあくまでも自分主体の記述に限定され、表現力に乏しいと考えることもできるのではないだろうか。すなわち自分の行動や主観といったことに記述が集中し、他の現象や状態を表現することに乏しい。これは

過程中核部の分析とも一致する。

また先の論文 (佐々木 2000) でも指摘したように、学生の中には英語の一文を一行づつ箇条書きにするものが少なくない。授業においてこれを指摘し、直すように指導しても箇条書きにするかわりに独立した節をそのまま同じ行に書いているだけということが多い。これも I に代表される人称代名詞や他の参与要素が多く主題として取り上げられる原因の一つと考えられる。すなわち、中学高校の英作文の授業においては一文を書かせることが主になっているためにまとまったパラグラフの構成をすることがない。そのため節と節との論理関係や時間関係を表現する付加詞を主題としてとりあげてパラグラフ全体の構成をまとめることがないのである。

反対に付加詞を多く使う作文ではどのようになっているのであろうか。次の例は Data 12 のものである。表 3 においては 2 番目に多く付加詞を使う割合が多い。ここでは顕在化のために付加詞の主題部を太字で表記する。

In this summer vacation, I make up my mind. I am going to take a plane. I have never taken a plane. Because I am scared of a airplane crash. Such my plan for the summer vacation is overseas trip.

That is my first visit to the foreign countries. Destination is the Europe. I will visit there on a group tour with my friend. We are planning to tour London, Paris, Rome and Geneva for 11 days. Now I shall introduce my schedule.

First day, I will leave for London from Nagoya airport by airplane. **The next day**, we are going to go sightseeing in London. **Third day**, we will leave London for Paris by the Eurostar. **Bisides**, we will travel in the first class. The schedule of fourth day is the sight of the Paris. We are going to see the triumphal arch, the Eiffel Tower and some art museums. **At the lunch** we are plan to eat escargot. My friend says "I can not eat KATATSUMURI. So, when I eat escargots, I am consider them to be shellfishes". But I think she should see the truth. And my schedule of this day is quite tight. We are going to go out to see the Versaille Palace. I am looking forward to seeing this palace.

Especially I would like to see the room of mirrors. Because I major in European and American history at the university. **Particularly** I want to major in history of France.

Moreover, I think it is so beautiful. **Afterward**, we are going to visit the places of scenic beauty and historic interest in Rome. And we will go to see the sights at ninth day. I am going to take a ropeway. **In fact**, I would like to take a mountain railroad train. **To my regret**, my tour's plan does not contain to take this train. **However**, we can see the panoramic view of the Alps from observation platform. **Maybe** the scene will move us.

Last day, I will really hate to part but I am going to return to my mother country.

That is my plan for the summer vacation. I am very excited. But I feel anxious about my travel. Because both of us do not good at English. I wish I could speak English fluently.²⁰

Data 12 では付加詞を主題部にとる場合に時空間に関する状況的要素、あるいは自分の主観的判断を示す法性要素を使用している。必ずしもこれらの要素を主題部に使用することがいいとは言えないものの、夏休みの出来事を記述するという一種のナラティブジャンルの特徴がこのような主題部の取り立てにあらわれていると言えよう。また次空間に関する付加詞を主題部にたてることによって、出来事の流れがより鮮明に描写されているし、さらにその出来事が自分にとってどのような意味をもっていたのかも浮き彫りになっている。すなわち、テキスト構成的機能という観点からすると、主題部にある程度の付加詞を取り上げる作文では節と節との照応関係が明確になり、全体の首尾一貫性があがると仮定できるのではないだろうか。

そこで主題部 (二次分析) の評価基準は付加詞を主題として取り上げる割合が多いものから高くする。次の表 16 は表 15 を付加詞の割合が高い順に並べ替えたものである。

²⁰ スペルの間違いなどは学生によって提出されたオリジナルのまま。

[表 16] 参与要素と付加詞の割合

	参与要素	付加詞		参与要素	付加詞
Data 26	63.6%	36.4%	Data 7	79.3%	20.7%
Data 12	65.9%	34.1%	Data 2	79.5%	20.5%
Data 30	67.6%	32.4%	Data 25	80.0%	20.0%
Data 9	69.2%	30.8%	Data 28	80.6%	19.4%
Data 14	70.4%	29.6%	Data 20	81.6%	18.4%
Data 13	71.4%	28.6%	Data 24	81.8%	18.2%
Data 19	71.4%	28.6%	Data 11	82.9%	17.1%
Data 5	73.3%	26.7%	Data 6	84.8%	15.2%
Data 4	74.1%	25.9%	Data 23	86.7%	13.3%
Data 15	75.0%	25.0%	Data 21	87.5%	12.5%
Data 18	75.0%	25.0%	Data 29	87.5%	12.5%
Data 17	76.2%	23.8%	Data 1	88.7%	11.3%
Data 10	77.3%	22.7%	Data 8	90.5%	9.5%
Data 3	78.6%	21.4%	Data 22	93.1%	6.9%
Data 27	79.2%	20.8%	Data 16	94.1%	5.9%
			平均	78.9%	21.1%

表 16 によるとそれぞれのデータに大きな差は見られないがあえて線を引くとすれば Data 19 と Data 5 の間に 1.9%、同様に Data 6 と Data 23 の間、さらに Data 6 と Data 23 の間に 1.9%の差異がある。そこで付加詞の使用比率が 28%以上のものを Group A とし、比率が 15%以上 28%未満のものを Group B, 15%以下のものを Group C として分類することとする。次の表 17 はその評価表である。

[表 17] 主題部 (二次分析) による評価表

Group A	Group B	Group C
Data 26	Data 5	Data 7
Data 12	Data 4	Data 2
Data 30	Data 15	Data 25
Data 9	Data 18	Data 28
Data 14	Data 17	Data 20
Data 13	Data 10	Data 24
Data 19	Data 3	Data 11
	Data 27	Data 6

4.7 総合評価

ここまで節の数と種類、過程中核部で使用されている過程形の種類とその割合、主題部の一次分析、二次分析とそれぞれの項目したがって評価表を作成してきた。ここではそれらの評価表をまとめて、ある項目で分類されたデータが他の項目でも同じグループに入っているのかどうかをみてみよう。表 18 は各項目で Group A として分類されたデータを順番ごとに並び替えたものである。

[表 18]Group A の評価一覧表

節の合計数	節の種類	過过程中核部	主題部 (一次分析)	主題部 (二次分析)
Data 1	Data 10	Data 14	Data 2	Data 9
Data 14	Data 13	Data 24	Data 7	Data 12
Data 20	Data 14	Data 25	Data 13	Data 13
Data 21	Data 20	Data 26	Data 14	Data 14
Data 25	Data 21	Data 29	Data 20	Data 19
Data 29	Data 22		Data 22	Data 26
	Data 24		Data 28	Data 30
	Data 29			
	Data 30			

[表 19]Group B の評価一覧表

節の合計数	節の種類	過过程中核部	主題部 (一次分析)	主題部 (二次分析)
Data 2	Data 1	Data 1	Data 1	Data 2
Data 3	Data 2	Data 2	Data 5	Data 3
Data 4	Data 3	Data 3	Data 6	Data 4
Data 5	Data 4	Data 4	Data 11	Data 5
Data 6	Data 6	Data 5	Data 12	Data 6
Data 7	Data 7	Data 7	Data 21	Data 7
Data 9	Data 9	Data 8	Data 24	Data 10
Data 11	Data 12	Data 9	Data 27	Data 11
Data 12	Data 15	Data 10	Data 29	Data 15
Data 13	Data 19	Data 11		Data 17
Data 17	Data 23	Data 12		Data 18
Data 19	Data 25	Data 15		Data 20
Data 22		Data 16		Data 24
Data 24		Data 17		Data 25
Data 27		Data 19		Data 27
Data 28		Data 20		Data 28
Data 30		Data 21		
		Data 22		
		Data 23		
		Data 30		

この表によると Data 14 は五つの項目すべてに分類されている。またそれに続いて Data 13, Data 20, Data 29 が三つの項目で該当している。他にも二項目において該当しているものがあるが、基準項目の半分以上に該当するという一つの判断基準として考えることができるのではないだろうか。すなわち三項目以上で Group A として分類されたデータはほぼ確実に A 評価の基準を越えていると仮定する。従って、Data 14, Data 13, Data 20, Data 29 については A 以上の評価をあたえることができると考えられる。

同様の判断基準を表 19 に示された Group B の評価表にも適用することとすれば、該当項目に三つ以上当てはまるデータとして、Data 1, Data 2, Data 3, Data 4, Data 5, Data 6, Data 7, Data 11, Data 12, Data 15, Data 17, Data 19, Data 24, Data 27, Data が挙げられる。これらのデータには B の評価を与えることとなる。

次の表 20 は Group C の評価表である。ここには節頭の接続詞の項目が追加される。やはり三項目以上に出現するデータを見てみると Data 8, Data 16, Data 18, Data 23, Data 26 という五つのデータが挙げられる。中でも Data 16 は五項目に、Data 8 と Data 18 は四項目と高い確率で該当する。これらのデータに対しては C 評価を与えることができよう。

[表 20] Group C の評価一覧表

節の合計数	節の種類	過程中核部	主題部(一次分析)	主題部(二次分析)	接頭の接続詞
Data 8	Data 5	Data 6	Data 3	Data 1	Data 4
Data 10	Data 8	Data 13	Data 4	Data 8	Data 6
Data 15	Data 11	Data 18	Data 8	Data 16	Data 7
Data 16	Data 16	Data 27	Data 9	Data 21	Data 9
Data 18	Data 17	Data 28	Data 15	Data 22	Data 10
Data 23	Data 18		Data 16	Data 23	Data 13
Data 26	Data 26		Data 17	Data 29	Data 16
	Data 27		Data 18		Data 21
	Data 28		Data 19		Data 22
			Data 23		Data 23
			Data 25		Data 25
			Data 26		
			Data 30		

5. 結論

本論では節、過程中核部、主題に着目して相対的な判断基準を適用した評価表を作成した。さらにこの評価表を組み合わせることでデータの評価を試みた。自由英作文の評価においては「印象」とか「主観」といったことが言われるが、本論で示したようにいくつかの項目に着目し、その頻度や割合という数値化された基準を適用することによりその評価基準も明示化できる。すなわち各項目からいくつかの光をあてることにより、ホログラフィーのごとく「自然さ」として漠然と捉えられてきた表現能力の姿を浮き上がらせることができるのである。

それでは本論で示された評価は本当に妥当なものと言えるのであろうか。この疑問に対して実際に Sasaki (2000)ではシドニー大学で開催されたワークショップにおいて簡単な例証を試みた。ワークショップの参加者にいくつかのデータを読んでもらい、それを A, B, C という三段階で評価してもらった。評価終了後参加者に各データごとにどの評価をつけたかを尋ね、多数決により暫定的に各データの評価を決定した。つまりあるデータに対して A, B, C のどの評価が多かったかを調べ、そのもっとも多いものをそのデータの評価としたのである。その結果、このワークショップの参加者から得られた評価は上記の評価表を基にしたものと合致した²¹。さらに JASFL 2000 の大会における研究発表においてもまったく同様のことをしたが、ここでも得られた評価結果は本論の方法で算出されたものと合致したのである²²。

もちろん上記の例証はあまりにも簡単で統計的なものを考慮したわけではなく、これにより本論の評価システムを正当化するのには性急であろう。これはあくまでも参考程度のことである。しかしながらこれまで各項目において仮定してきた評価基準とそれらを組み合わせて導き出される評価が、まったくでたらめなものではなく、ある程度の妥当性があるということも同時に言えるのではないだろうか。すなわち「表現力がある」とか「自然」と判断される側面は本論で言及した側面によって具現化されているのである。もちろん作文の評価は評価基準だけにとどまるものではなく、さらに単語や文法のレベルの能力も考慮されるべきである。また評価基準を作文のジャンルやテナーによって変化させるということも必要であろう。これらは本研究の今後の課題となる。

最後に、データの中には各項目で三項目以上に該当しないものも多い。残念ながら本論の分析レベルはまだその段階に至っていない。これは各グループ評価一覧表を比べたり、さらに細かい評価基準を設定することにより可能と考えられるが、それは今後の研究課題である。

参考文献

- Brown, G. and G. Yule. 1983. *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press
- Coulthard, M. 1987. "Evaluative text analysis". in Ross, S. and T. Threadgold (eds). 1987. *Language Topics: Essays in Honour of Michael Halliday*. vol.2. Amsterdam: John Benjamins
- 船橋洋一. 2000. 「あえて英語公用語論」. 文春新書. 東京: 文芸春秋
- 古川法子. 1999. 「英作文の評価は書いた長さで行う」. 『現代英語教育』. 3月号
- Fries, P. (1995) "A personal view of Theme," in *Thematic Development in English Texts*, ed. Mohsen Ghadessy, London: Pinter
- Halliday, M. A. K. 1978. *Language as Social Semiotic*. London: Arnold.
- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan, 1989, *Language, Context, and Text: aspects of Language in a social semiotic perspective*, London: Oxford University Press
- Halliday, M. A. K. (1994) *Introduction to functional Grammar*, 2nd ed., London: Edward Arnold.
- Hoey, Michael. 1983. *On the Surface of Discourse*. London: George Allen & Unwin
- 橋内武. 1995. 『パラグラフ・ライティング』. 東京: 研究社
- 伊藤健三、島岡丘、村田勇三郎 (1982) 『英語学と英語教育』、英語学大系第 12 巻、東京: 大修館書店
- Ragan, P. 1989. "Applying functional grammar to teaching the writing of ESL". *Word*:

²¹ Data 1, Data 10, Data 14, Data 16, Data 17, Data 18, Data 20, Data 23, Data 25, Data 27 を使用したところ、A と判定されたのは Data 20, B は Data 10, Data 14, Data 17, Data 23, Data 25, Data 27, C は Data 16, Data 18 であった。

²² Data 14, Data 16, Data 18, Data 20, Data 27 を使用したところ、A と判定されたのは Data 20, B は Data 14 と Data 27, C は Data 16 と Data 18 であった。

40.1-2: 117-127

- Sasaki, M (2000) "Applying Systemic Functional Grammar to Evaluating the Writing of EFL.": (workshop) at *Workshop 2000: Language, Text and Culture in the Global Context*, University of Sydney, Sydney, Australia
- 佐々木真 (2000) 「「選択体系機能文法の英語教育への応用：節と過剰中核部の分析による作文の評価」、愛知学院大学短期大学部研究紀要、第8号
- 佐々木真 (2001) 「主題分析を中心とした選択体系機能文法の英語教育への応用」、愛知学院大学短期大学部研究紀要、第9号
- 龍城正明. 1997. 「選択体系機能言語学における基本概念と主要術語」. 『言語』 4月号. 86-97
- Thompson, G. (1996) *Introducing Functional Grammar*, London: Arnold
- 山口登 (1998a) 「選択体系機能理論による自然言語モデルの構図」. 『日本ファジィ学会誌』. Vol. 10. No.3
- 山口登 (1998b) 「英語における節の主題：選択体系機能理論におけるメタ機能の視点からの再検討」、JASFL Occasional Papers 1:1
- 山口登 (2000) 「選択体系機能理論の構図」. 『言語研究における機能主義』 (小泉保編) 東京：くろしお出版

Applying Systemic Functional Grammar to English Education: Evaluating the Writing of EFL Students Base on the Analysis of Clause, Process and Theme

Makoto Sasaki

Aichi Gakuin University, Junior College

This paper presents an attempt to apply Systemic Functional Grammar to EFL writings aiming at evaluating them objectively as possible. It shows that compositions can be appreciated in terms of the three metafunctions of a clause (Halliday 1994). It also proposes several statistical criteria that can be used to classify the EFL compositions into aptitude levels.

The data are thirty compositions collected from a composition class conducted by the author at Aichi Gakuin University. They are analyzed in terms of (1) number of clauses, (2) types of clauses, (3) process types and their frequencies, and (4) thematic structure. The results are as follows:

- (1) The compositions with larger number of clauses are evaluated high while ones with small number of clauses are low.
- (2) The compositions with more dependent clauses should be evaluated high.
- (3) Proficient students tend to use various kinds of process types while low level students do not.
- (4) Proficient compositions are congruent with adjuncts used in thematic positions while less proficient compositions are not.

Each of the insights above can be used to categorize EFL students' compositions into three levels from high to low, and furthermore, when the four results are combined, proficiency level can be evaluated with high reliability.